共同研究報告

2020 年度 飛騨高山 AL の活動報告

Hida Takayama AL Activity Report in 2020

共同研究メンバー
○野坂美穂 *、金美徳 *（○代表、執筆者）

キーワード：地域資源の再発見、特産品開発、スキー場の活性化
Keywords：Rediscovery of local resources, the development of local products, the revitalization of ski resorts

1. はじめに

飛騨高山アクティブラーニング・プログラムは年に 2 回の実施であり、今年で四年目を迎えた。高山市久々野町は人口減少・少子高齢化が著しく、地域活動やコミュニティの衰退が懸念されており、定住人口の増加を見据えた「地域活性化」が急務となっている。「久々野まちづくり運営委員会」では、この課題に対応すべく、情報発信事業等をはじめとした地域の資源・魅力の再発見とその活用方法の構築に取り組まれている。

この取り組みに本学の学生が加わることの意義は、若者目線・学生目線という第三者の目からみた地域資源の発掘や地域住民が抽出した地域資源・魅力の再評価にある。久々野町の方々と本学学生が議論を重ねながら、地域の活性化・地域の課題解決に向けた新たなアイディアを創出し、そのアイディアの実現に向けて地域主導で行動へと移し、持続可能なまちづくりに寄与することが本プログラムの目的である。

2. 飛騨高山 AL プログラムの概要

2.1 2020 年度の AL プログラムのテーマ

2020 年度の飛騨高山 AL プログラムのテーマは、「道の駅の特産品開発」と「スキー場の活性化」の二つである。特産品開発については二年前にも行い、「りんごの朴葉味噌」が商品化されたが、今回はその第二弾として位置づけられる。今回は、高山で地元食材（りんご、もも、ほうれん草、トマト）を用いた「高山らしさ」を意識した商品アイディアの提案を行った。一方で、スキー場の活性化については、高山にあるスキー場の来客者数の減少が著しいという現状を踏まえ、来訪者数の増加に向けた方策を検討した。事前にスキー場の関連データを入手し、インバウンド観光客やファミリー層の増加を見込んだ提案、また雪の降らないグリーンシーズンのスキー場の活用についての提案を行った。尚、本 AL プログラムでの取り組みは、地元紙

* 多摩大学経営情報学部　School of Management and Information Sciences, Tama University

の岐阜新聞（2020 年 7 月 29 日掲載）および高山市民時報社（2020 年 7 月 29 日掲載）にとりあげられた。

2.2　高山 AL プログラムの活動内容

（1）春学期の高山 AL

①実施方法及びスケジュール

新型コロナウィルス流行に伴う感染拡大防止を鑑みて、春学期の高山 AL は全てオンライン（ZOOM）での実施とする運びとなった。オンラインでの AL の実施は初の試みであったが、発表や意見交換については、対面の場合と遜色なく円滑に行うことができた。高山市の久々野町（岐阜県）、帝塚山大学（奈良県）、そして多摩大学（東京都）の三地域をオンラインでつなぎ、二大学の学生が自分達のアイディアについてそれぞれ提案を行った。6 月～ 7 月にかけて、事前学習と最終成果報告会の計 3 回の実施となった。

②活動内容

2020 年 6 月 19 日に、学生のアイディアの中間報告会を行った。特産品開発チームは、「高山の良さを活かし、高山にしかない商品をつくりあげること」をミッションとして、幾つかの商品アイディアを提案した。商品アイディアを提案するうえで、マーケティングの知識を用いながら、商品の特徴、価格、顧客ターゲット、用途等を詳細に説明した。

一方、スキー場の活性化については、2 チームに分かれて提案を行った。A チームは、「久々野を愛してもらおう」というコンセプトを掲げ、新しいコミュニティの創出が必要であることを強調した。そのうえで、年間を通して久々野やスキー場への来訪者増加のための方策を提案した。具体的には、子ども向けのキャンプや雪フェス（雪だるまつくり大会や謎解き等）、インバウンド観光客（特に雪の降らない東南アジア諸国）を対象とした天体観測や日本酒を楽しむ企画等を提案した。これに対して B チームは、雪のないグリーンシーズン（夏）とスノーシーズン（冬）の 1 年を通じたスキー場の活性化について、アイディアを提案した。具体的には、グリーンシーズン（夏）のスキー場の活用例として国内・海外の参考事例を示し、スノーシーズン（冬）のレストハウスの活用、インバウンド観光客向けにキャッシュレス化、さらには飛騨高山の木材を使用した「手作りそり」の提案等を行った。

2020 年 7 月 19 日に学生のアイディアの最終報告会を開催し、中間報告で久々野町の地域住民の方から頂いたコメントやアドバイスを踏まえて、さらにブラッシュアップしたアイディアを報告した。質疑応答の時間では、これまで以上に活発な議論が行われた。

特産品開発チームは、実際にレシピを考案したうえで、各学生が自宅で試作を行った。他方、スキー場の活性化については、A チームは、スキー場の「国内スノーリゾートの現状」や「インバウンド観光客」のデータ分析したうえで、スキー場活性化に向けた提案を行った。他方、B チームは前回のアイディアに加え、夏でもスキーを体験できる VR の導入や、木育の一環として簡単に作れる「手作りそり」の提案を行った。「手作りそり」は、木育に加え、SDGs や地元産業への貢献にもつながることを強調した。

(2) 秋学期の高山 AL

①実施方法及びスケジュール

春学期はオンラインでの実施となったが、秋学期はコロナがやや落ち着いてきたため、11月8日～10日までの2泊3日で高山に訪問した。初日(8日)は、学生によるプレゼンテーション後に地域住民の方と意見交換を行った。2日目（9日）は、特産品開発チームとスキー場の活性化チームは別行動となり、前者のチームは果樹園の視察に加え、実際に自分たちが考案した商品の施策を行った。後者のチームは、スキー場を実際に視察した。最終日（10日）は視察を踏まえた、最終プレゼンテーションを行った。

②活動内容

特産品開発チームは、アイディアの手がかりを得るために、りんご農園に訪問した。農園では、農園の概要や、りんごの栽培方法から収穫に至るまでのプロセスや品種の違いに関する説明を受けた。そして、農園で製造されている手作りのアップルパイをつくる体験をした。その後、ほうれん草農家に訪問し、ほうれん草の生産過程の説明を聞いた後、収穫体験を行った。そして、ほうれん草を久々野支所に持ち帰り、学生が提案した商品アイディアの試作を行った。

一方、スキー場活性化チームは、スキー場の「ひだ舟山スノーリゾート・アルコピア」(以下、「アルコピア」と略称)、そして比較対象となるもう一つのスキー場「モンデウス飛騨位山スノーパーク」を訪れ、アルコピアの再活性化案模索のための現地調査を実施した。特にアルコピアは、スキーコース中腹が平坦になっており、そこから見下ろす久々野地域や飛騨山脈の景色は神々しいほどの絶景であったことから、キャンプ場やグランピング場としての利用、レストハウスによる食事・備品提供など、幾つかの提案がなされた。その後は、両スキー場間の中間に位置する「あららぎ湖（久々野防災ダム)」にも訪れ、サイクリング・コースやサイクル・ステーション（休憩所、特産品販売所）開設など、アイディア着想するうえで大いに参考となった。

特産品開発チームの様子

スキー場活性化チームの様子

3. 本プログラムを通じた学生の学び・気づき

AL プログラムでは、プログラム終了後に学生に AL 報告書の提出を課しており、これによってプログラムを通じて学生自身が何を学んだのか、あるいはどのような気づきを得たのかなど、自らを振り返る機会としている。

今回のプログラムにおいては、提出された AL 報告書を見る限り、上級生と下級生では直面

する課題等に相違がみられた。本プログラムはチームでの活動を基本とするが、上級生は「チームマネジメントの難しさ」に直面し、自身がリーダーとしてどのように行動すべきかに課題に直面したようである。具体的には、上級生が下級生の意見を尊重しつつもチームとしていかに同じ方向性にもっていくか、チームメンバーの特性を見極めながら個々のメンバーに適した役割をどのように分担すべきかなどの点に課題が生じたとの記述が見られた。

他方、下級生については、上級生の物事の考え方や発表の仕方など、学ぶところが多くあったという記述が報告書には多く見られた。また、1 年生は今回が初めての AL の参加となるが、上級生からの学びの他に、プログラム参加を通じて大学生活面での学習意欲を喚起するきっかけとなり、今後の自身の大学生活を通じた自己の成長に期待していることが報告書から読みとれた。さらには、地域への関心の高まり、商品企画の難しさ、そして企画を考える過程そのものの「楽しさ」や「やりがい」を感じたようである。一方で、AL プログラムにおける課題に取り組むうえでは、多少の意見の対立やミスコミュニケーションなどの苦労もあったことが記述されていたが、そうした経験を糧にして、学生自身が自己の成長につなげることを期待したい。

4. まとめ

春学期は、オンラインでのプログラムの実施という初の試みであったが、円滑にプログラムを進行させることができた。とはいうものの、「今回で得た成果は、なんと言ってもリアルの素晴らしさに気づけたことではないか。」と学生が報告書で記述している通り、やはり実際に現地に足を運び、地元の人々との直接的な交流を通じてのみ得られる価値、オンラインでは決して得られない価値があることも事実である。

また、今年度はこれまでと異なり、通年での AL プログラムに変更した。その結果として、地域の課題解決に対してより考えを深めることができ、また上級生と下級生がより強固な関係性を築くことができ、これまでの 4 年間の中で最も理想的な形での AL プログラムとなったのではないかと感じている。微力ながらも学生・教員とともに高山市の地域の課題解決に寄与できるように、引き続き活動を行ってまいりたい。